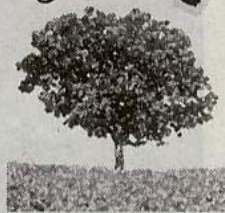


いのちの樹



003

第1部 芽生える

長いコック帽をかぶった長身のシェフ二人が、目の前でフライパンを振っている。ニンニクをいためるおいしそうな香りが漂ってきた。

「子育ての現実に戻る前の「ほうびかな」。お産から解放され、満足している。ニンニクを揚げにパスタをフォークに絡めていく。

「手ぶらで産める」と

「手ぶらで産める」と

「環境の快適さとい

「環境の快適さとい

「見た目で競っている

「見た目で競っている

安全前提に付加価値演出

丸や四角のテーブルが並び室内は、まるでしゃれたレストラン。テーブルに着くお客さんが、すっぴんにピンクのパジャマという、赤ちゃんを産んだばかりの女性である

少子化の波に、産婦人科の

一人で月三十件のお産が

一人で月三十件のお産が

一人で月三十件のお産が

一人で月三十件のお産が

一人で月三十件のお産が

一人で月三十件のお産が

今どきのお産

四日市市川島町の「おばたレディースクリニック」。毎週二回、高級ホテルからヒントを得たという院内のオープンキッチンで、昼食のバイキングを開いている。

「赤ちゃんが元気で生まれるのが当たり前。それを前提に、プラスアルファを求めるのが(お産に対する)今の考え方」。

「赤ちゃんが元気で生まれるのが当たり前。それを前提に、プラスアルファを求めるのが(お産に対する)今の考え方」。

「赤ちゃんが元気で生まれるのが当たり前。それを前提に、プラスアルファを求めるのが(お産に対する)今の考え方」。

「赤ちゃんが元気で生まれるのが当たり前。それを前提に、プラスアルファを求めるのが(お産に対する)今の考え方」。

「赤ちゃんが元気で生まれるのが当たり前。それを前提に、プラスアルファを求めるのが(お産に対する)今の考え方」。

「赤ちゃんが元気で生まれるのが当たり前。それを前提に、プラスアルファを求めるのが(お産に対する)今の考え方」。

好みのメニューを注文すれば、できたてをシェフが運んでくる。デザートは、溶けたチョコに一口サイズのシュークリーンやいちごを付けて食べる「チョコレートフォンデュ」。

このクリニックのオープンは二〇〇三年十月。入院時の荷物は「下着だけOK」が売りの一つ。パジャマからタオル、歯ブラシまで必要な

危険と隣り合わせのお産も、医師の技術と努力で信用は上がり、今は元気で生まれることに価値は見いだせなくなっている。

危険と隣り合わせのお産も、医師の技術と努力で信用は上がり、今は元気で生まれることに価値は見いだせなくなっている。

危険と隣り合わせのお産も、医師の技術と努力で信用は上がり、今は元気で生まれることに価値は見いだせなくなっている。

危険と隣り合わせのお産も、医師の技術と努力で信用は上がり、今は元気で生まれることに価値は見いだせなくなっている。

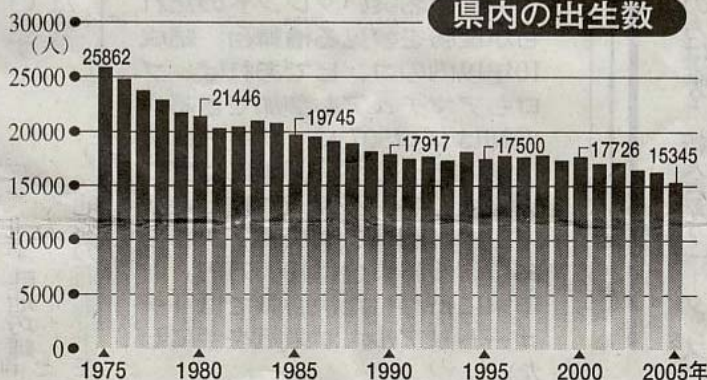
危険と隣り合わせのお産も、医師の技術と努力で信用は上がり、今は元気で生まれることに価値は見いだせなくなっている。

危険と隣り合わせのお産も、医師の技術と努力で信用は上がり、今は元気で生まれることに価値は見いだせなくなっている。



オープンキッチンで週2回開かれる昼食のバイキング。レストラン並みのデザートも。四日市市川島町の「おばたレディースクリニック」で

県内の出生数



県内の赤ちゃん出生数

1975(昭和50)年に約2万5800人だったのが、85年には2万人を切り、2005年は約1万5300人に減っている。厚生労働省の人口動態調査では、05年の県内の出生率は人口1000人に対して8.4で全国平均と同じ。1人の女性が一生の間に産む子どもの数を示す「合計特殊出生率」は1.36となっている(全国は1.26)。

水泳教室など、いまどきの企画を取り入れる裏で、個人経営では珍しい十人もの助産師を集め深夜でも三十分以内に帝王切開できる体制を敷く費用をかけている。

「見た目で競っている場合ではない。医師がすべて一人で扱うには限界がある。このままでは分娩(ぶんべん)を制限しないといけないことにもなる」と県産婦人科医会の二井栄会長(左)。

安全という最大のサービスを保つには、せいた